

## 卒業作品展

テーマ「自由・自らへの戒め」

作品名「時の人」

海原会会員

松下 由佳

筆者の松下由佳さんは、神奈川県在住の現役の高校三年生（この記事を皆様が読まれている頃には高校を卒業されていることと思います。）です。

高校のデザイン美術コースでの勉学の傍ら、予科練・特攻隊など近代の戦史に興味を持ち、勉強がしたいと、昨年八月に海原会ただ一人の現役高校生会員となりました。そして、迎えた令和三年二月に開催された卒業作品展で発表された映像作品を制作するにあたっての考え方等を、この度機関誌予科練に投稿していただきました。

なお、制作した作品は、現在海原会のホームページにアップしていますので是非ご覧ください。

（事務局 平野）

【はじめに】

この作品は演技をしてくれた同じクラスの友人二人、デザイン美術コースの先生方、衣装を貸してくれた知り合い、その他多くの友人の協力をいただいで、完成させられた作品です。おかげで良い作品作りができました、ありがとうございます。ここに感謝を記します。

【作品名「時の人」の由来】

人間は遅かれ早かれ寿命が来て死ぬ。寿命の期間でしか生きられない私たちは、昔に生きていた人の様子も分からないし、百年後に生まれてくる人のことも分からない。その同時に生きている人のことしかわからない。どの時代であっても歴史の中で生きた人はその時間にしかないが、確かにその人たちは彼らの時間の中で、今の私たちと同じように生活をしていたし、同じように生きていたことを伝えたい。

地球上全ての生きものは、一度死んだら二度と全く同じ個体

が生まれ続けることはない。

もし生まれたとしても魂が同じとは限らない。人間でいえば、たった約八十年の寿命をかかえて、その八十年を過ぎたら死んでしまうかもしれないし、その前に死ぬかもしれない。

地球が生まれる前から続く「時間」という枠の、細胞並みに小さな時の中に私たちは今生きていく。「今を生きる」とその先に続くのは、未来だけしかない。

なぜこの世界では先にしか進めないのか。

「前の反対語は後」なのに、この世界の理には「前」しかない。でも、後ろがあるから前がある。後ろの部分はこの目では見られないけれど、その後ろの世界で生きた人が、決して見ることでできない前で生きている私たちにその時のことを偶然にも残してくれている。それが歴史だ。

歴史が残っているというの、奇跡以外のなものでもない。過去の出来事なんてもちろん見たことはないが、それは本当にあった出来事だ。でも自分の目

で見えないから実感がない。

今を必死に生きている多くの人とって、尚更過去のできごとなんて気にならないし、興味もないのかもしれない。

だが、今私たちが生きているように、先人たちも同じように後ろの世界で生きていた。先人たちがその時に生きていた人であるように、私たちもいずれ「その時に生きていた人」になる。この因果のような事象を示すために、「時の人」という作品名をつけた。

【あらすじ】

この作品のあらすじは、「太平洋戦争末期、海軍飛行兵の主人公芳田と、陸軍飛行兵の高橋、そして水兵の長田の幼馴染の三人が集まって話をしている場面から始まる。特攻で出撃することになった芳田は画家になりたい夢を語るが、かなわないことに落胆する。

出撃直前になり、高橋と長田が芳田を心配するが、すでに覚悟を決めている芳田の後ろ姿を見送ることしかできない。戦後、高橋と長田は出会い芳田の話を



こちらからも作品の視聴が可能です。

する。芳田はここにいないが、家族や友人を守るために、彼が特攻でいったことを未来の子に伝えたいと語り復興を目指していく。」である。

この作品を制作するにあたって、題材になった出来事がいくつかあった。

まず一つ目は、

「芳田は絵を描くのが好きで、将来は画家を目指していた」という設定だが、これは私が高校一年生の夏休みに長野合宿で行った無言館が元になっている。

無言館は長野県上田市にある美術館で、戦没した画学生の絵画（遺作）が展示されている。戦災に巻き込まれ戦死、戦病死してしまった画学生の遺品や絵画を見ていると何だか苦しく感じた。この苦しさは何だろう。

今思えばそれは、「私は今こうして自由に絵を描いているし、これから描き続けるだろう。だけど、ここに飾られている絵を描いた人たちは描きたくても描けなかったのだ。」といった感情で、それが懺悔したい気持ちに

似ていた。「課題苦しいな、こんな制作期間中にできるわけないよ。」と愚痴をこぼしていた自分が恥ずかしく感じたのだと思う。

描きたくても描けなかった彼らと、自由に描ける環境と時間があるのに愚痴を言っている私。比べたら私は贅沢だった。

書籍「まんが少年、空を飛ぶ」

という本の著者として名前のある山崎 祐則さんは、海軍の特攻隊員として出撃された方で、絵を描くことが特に好きで得意だったそうだ。本を買って読んで本当にかわいらしくて上手で、イラストチックな絵を描く彼は十九歳で亡くなられた。

無言館に展示されている戦没、画学生の絵を見て、山崎さんの絵を見て……。感じるものが多くあった。テーマにもあるように彼らにはあったはずの「自由」がなくなってしまうということ。どんな気持ちでいたかということ。

そして「自分への戒め」としても、この感情や思いを作品とし

て表現して、見る人に伝えたい。表現して、見る人に伝えたい。

二つ目は、

戦後に戦争体験者の方が積極的に慰霊活動をしている（参加している）という。

戦時中に亡くなった戦友や家族を思って参加したり開催しているという話を見たり聞いた。それは日本国民のほんの一部の人かもしれないけれど、その方々は戦争で亡くなられた方を想う気持ちが強くあり、辛い記憶だから忘れようなんてことはしないで、亡くなった彼らの事を想い続けているに違いないと強く感じた。

私は「戦争で知り合いが亡くなる」という場面に会ったことはないし、そもそも戦争を知らないが、そのとき亡くなられた方々を忘れないで想い続けることは大切だということは強く感じた。

そして大切だと思えるから、今も資料館や平和記念館にその当時を体験した方々の証言記録や様々な史料を残していくべき

だと考え、自分自身も積極的にボランティアとしてそんな活動に参加していきたいと考えている。

三つ目は、

戦史研究を行う自分自身のアイデンティティーの問題だ。

戦史研究に対して色々考えている時に、ある疑問が浮かんだことがある。それは、当時の写真が載っている写真集を集めることや個人にポイントを当てて調べることが果たして本当に正しいことなのだろうかという疑問だ。

今自分がしていることは、自らの好奇心を満たし、自己満足で終わっているのに過ぎないのではないか。そもそも自分がこうして特攻や戦争を調べ始めたきっかけは何だったか。こんな曖昧な意思で調べていて、相手にとって失礼ではないか。

このままでは「かっこいい」「好き」という気持ちだけに走り、自分自身の趣味の範疇だけで終わって、得たことをどこにも発信せず自分だけがいい気分、と

という結果になってしまいうのでは  
という不安があった。

戦史の研究というのは、生半可  
な気持ちや考えで行うことでは  
ない。

この戦争で苦しみ悲しんだ方が  
沢山いて、その上で生かされて  
いる私がいるのに、間違った思  
考（思想）で研究した内容を発  
信しても何の価値もない、ただ  
の自己満足だ。自分が変な方向  
に曲がったままで終わらせる研  
究をするくらいだったらもうや  
めてしまえ、と考えたこともあ  
った。

それでも、やっぱりこのままで  
はだめだと鞭を打った。「やめて  
しまったらだめだ。戦没、画学  
生のことや今まで学んできたこ  
とを思い出すと、戦争が終わる  
まで必死だった、今の平和の土  
台になられたご先祖様のことを  
未来に伝えていきたい。思想信  
条の右左を誇張せず、本当にあ  
った事実を残していきたい」と  
初心に帰ることができた。

このような悩みを乗り越えて、  
わたしの今の生活があるのは  
縄文時代から始まり、時が進ん

で七十六年前に生きていた軍人  
さんや、戦後復興に励んだ方が  
今まで頑張ってきた。そしてそ  
ばにいてくれる家族がいるから  
であり、そのことにまず感謝し  
なければならぬということをも  
再認識した。

そして、私が戦史研究をして  
いるにはきつと意味がある。  
今まで調べてきたことも無駄で  
はないということはこの作品制  
作を行う過程で確信できた。

こうした経験や思いを作品とし  
て残したいと思い、多くの方に  
協力していただきながら作品を  
完成させることができた。

これから先も、自らの使命を心  
にきちんと受け止めて活動して  
いきたい。